

かえるのうた

第10号 2017・7月

ほんにかえるプロジェクト発行
汪楠責任編集



壁画モザイク

イタリア・ラベンナ・サン・ヴィターレ教会

陰口は分裂招く罪

—教皇司式ミサ中の説教—

最も頻繁に犯されている罪は、互いに悪口を言い合い、裏切るだけでなく分裂を招きます。

悪口と陰口には、本当に心の奥底まで痛みを感じさせられます。それはまるで、私たちが互いに石を投げ合っているようです。それで喜ぶのは悪魔です。悪魔にとってはお祭りです。

言葉の使い方はとても大切です。教会の一員として洗礼を受けているキリスト者全員に、聖霊のたまものが与えられています。キリスト者は、そのたまものを祈り続け、願わなければなりません。たまもの中には、ラテン語ではない「特別な言葉」を使う能力も含まれます。それは「優しさと敬意の言葉」で、人の振る舞いにも反映されます。

見るに耐えないのは、キリスト者を自称する人たちが敵意(または怒り)に満ちている姿です。

悪魔は人が神に仕え、聖霊の介在

を守ろうとする努力を、くじくすべを知っています。どんなことをしてでも、私たちの言葉が優しくならないように、敬意を伴わないように働きます。

優しさと敬意で聖霊を守ろうとしないキリスト者の共同体は、マリア像の足下で踏みつけられている蛇のように、長い舌を持っています。長い舌は私たちの共同体を破壊する敵、無駄話です。私たちキリスト者の共同体で最も多い罪です。

野心や羨望(せんぼう)、嫉妬から生まれる自慢話や自己顕示は、集まっている人々を分裂させるだけでなく、新しく来た人をも遠ざけてしまいます。

多くの人が神の平和と優しさを求めて教会に足を踏み入れます。しかし、そこで陰口や競い合い、信者同士の内輪もめに出くわします。かれらは「もし、この人たちがキリスト信者なら、私は異教徒のままでしょう」、といい、幻滅して去って行ってしまうでしょう。私たちが、その人たちを遠ざけてしまうのです。

兄弟たちよ、互いに悪口を言い合ってはなりません。

新約聖書 ヤコブの手紙4章11節

5歳の戦争体験-平和への願い

副代表 井手 愛子 s. c. q.

平常と異なる事態に遭遇すると、不安定で、死に直結するような方向に意識が傾斜していく。「何故」だろうと探っていくと、そこには、優しく目覚めさせられるのを待っているかのような、5歳の原体験が眠っていた。

平凡だが両親の愛に包まれた平和な家庭。だが、平和を崩す力は外から来た。第2次世界大戦の勃発は身近に危険をともなって迫ってきた。強制疎開。昼夜を問わない敵機の襲来。灯火管制。

ワット数を落とした電灯に、黒い布をかけ、細心の注意をはらって、身を寄せ合い、肩を触れ合って耳をすませていた。「B29」か機銃掃射機「グラマン」か爆音で解った。両親の緊張がピーンと張りつめた弓弦のように子供たちを囲い込む。

ある夜、父が厳かに宣言した。戦争に負け、米兵が襲って来たら、無事ではすまない。その時はお父さんが子供を殺し、お母さんを殺して最

後にお父さんも死ぬ。銃を使うとも言った。聞き返すでも異をとらえるでもなく、恐怖感さえなかった。死においても家族は一緒だった。

昼下がりに、空襲警報が鳴り響いた。母は姉と兄を家で待つ。3人で防空壕に行くよう命じられた。遮蔽物のない草原に達したとき、南の上空に2機、翼が光る。とたんに、姉達は繋いだ手を離し全速力で走り出した。防空壕に着くまでに、私は見つかる。「どうしよう」走りながら考えた。右手に、白い石壁を廻らせた墓が並び、2メートルほどの木が葉を繁らせている。石壁のコーナーと木の間に隠れよう。小さな私は見つからないだろう。そちらに足が向かった時、姉達が「愛ちゃん、こっち！」と手を振り、必死に叫んでいる。声に引っ張られ私も必死に走った。姉達の手に触れたところで、記憶は途絶える。

しかし、この日の情景は完璧にフリーズされて、私のなかに今も在る。

“平和とは？” 原爆投下によって、日常生活を徹底的に破壊された「5歳の原体験」を踏まえると、平

和を崩す悪に対峙し、善（秩序）を構築することだと考える。

聖フランシスコ（13世紀イタリア）の「平和を願う祈り」は破壊と構築をとらえて美しい。

*

主よ、わたしを平和の道具としてください

憎しみのあるところに愛を
争いのあるところに和解を
分裂のあるところに一致を
誤りのあるところに真実を
疑いのあるところに信頼を
絶望のあるところに希望を
闇のあるところに光を
悲しみのあるところに、喜びを
慰められるよりも慰めることを
理解されるよりも理解することを、
愛されるよりも愛することを
与えることによって与えられ
許すことによって許され、
死ぬことによって永遠の命を
生きるからです。

祈りの作者は不明で、第1次世界大戦（1912）前夜、フランスで唱えられ、世界中に広まったと言われる。

原爆投下の日、爆心地浦上に面し

た縁側で次女はひよこを遊ばせていた。一瞬の高熱（6000度）の後、爆風圧で家の奥の方に吹き飛ばされた。行水を終わったばかりの長女は、天井まで吹き上げられ、右肩に大きな打撲痕を負った。母は飛来した瓦に直撃され、こめかみのところから大量の出血をした。外では至る所から小さな火柱が、ポッポポッポと燃えあがり、街路樹も生木のまま燃え続けた。地獄とはこういう所かと思ったそうである。二人は大量の放射能を浴びて瀕死の状態となり、数十キロの炎天下を、叔父の曳くりヤカーで田舎に運ばれて来た。数日間の嘔吐と下痢をくり返し、鍼灸院の床に力無く、横たわっていた。母は喪服を準備した。

マタイ福音書に「平和のために働く人は幸いである。かれらは神の子らと呼ばれるであろう」とある。

「和平」の字義は穀物が平等に口に入ることである。穀物とは、言葉を変えていうならば、「人権」である。平和な世界とはそういう世界である。

平和について



藤本嘉信

(元高等学校長)

平和について書こうとすると重い気持ちになります。

人類が発生して以来、多くの争いを繰り返し、悲惨な結果を生み多くの立派な方々が平和の大切さを述べ、平和を訴え、祈って参りました。

しかしながら現在も争いが絶えず、何百万という人々が難民として飢え、劣悪な環境の中で路頭にさ迷っています。

また今は、中東地区だけでなく東アジアでも非常に危険な状態です。北朝鮮を取り囲む状況が、戦前の日本の状況に余りにも類似しているのです。当時、日本が中国や東南アジアに進出することに世界は危機感をもって、食糧、燃料などに規制を加えました。次々と選択肢を失った日本は真珠湾という暴挙に出ました。もし北朝鮮が第二の真珠湾を行なったら、世界規模で破滅が起きます。触発されれば何が起きるかわかりません。

世界の指導者にイソップ物語の「北風と太陽」を読んであげたいと思います。イソップは紀元前6世紀のギリシャ人です。指導者だけではありません。一般市民も読んであげたいと思います。

それは、勇ましいことをいう指導者、愛国的なことを、熱狂的に叫ぶ指導者に市民は拍手を送る傾向があります。今は〇〇ファーストとか、愛国とか、更に自分が、自分の宗教がということだけでなく、互いに尊重しあい、自分だけが正しいのでなく、妥協でなく、尊敬と調和をもって社会を構成すべきだと思えます。相手の非を見つけて、批判して、正義ぶるのでなく寛容をもって、他人の欠点を探すのでなく長所を発見する喜びを知る時、私達は幸せに、平和に暮らせると思えます。

聖書の中で、敵を愛しなさい。自分を愛してくれる人だけを愛しても何の報いがあるか。自分の兄弟だけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるだろうか、イエスは言われている。指導者や政治家だけでなく、私達が力や権力で指導するのでなく愛の寛容さをもって生活する時にファシズムも起きなくなると思えます。

へいわとはなにか

事務局長 汪 楠

ほんにかえるプロジェクトは受刑者の更生を支援する団体です。そんな団体が 8 月に向けて、平和について考えようと役員会で決まりました。平和であることに越したことはないと思います。でもそのために、団体として何ができるか、あるいは何が平和を壊しているのかについて考えたことはあんまりない。

私個人は政治問題に一定の関心があり、憲法を守る活動に参加し、自分の考えも持っています。しかし、その政治思想を更生支援活動であるこのプロジェクトに持ち込むつもりはありませんでした。今の活動は政治と無関係と思うようにしていたところでしたが、意外にも(失礼)副代表のシスター井手から 8 月に向けて、平和について考えてみようという提案され、代表の田中さんもすぐ賛成したので、自分も思いを新たにして、このかえるのうたの紙面に平和について自分の考えをまとめてみることにしました。

平和(へいわ)とは、戦争や内戦で社会が乱れていない状態という。その

正反対に位置するのは戦争と思います。ではその戦争がなぜ起こるのか、それはやはり自国の利益(安全保障も含め)だけを考えると、軍事力を強化しようとし、そして力で問題を解決しようとして、戦争になります。

これは何も国家間だけの問題ではありません。個人同士でもそうですね。刑務所では大半数の受刑者は自己の意思と関係なしに、集団生活を強いられます。小さくでは舎房(居住空間で 6~9 人)、大きくでは工場(作業空間で 20~60 人)という集団の中で受刑生活を送ります。とても狭い空間ですから、ストレスもたまり、いざこざが絶えません。

そんな中で、やはり力を誇示し、自分だけの安泰を求めようとする人たちがいます。そして個人間の戦争である喧嘩を起こします。国際関係におけるの平和について考えるのは難しくても、この個人間の平和については私なりの考えがあります。それはやはり共存共栄というか、相手を認め、自分との違いを受け入れ、我慢するしかないと思います。我慢とは何か。それは相手の要求にひたすら応じるのではなく、自分の考えをもしっかり伝

えることも含めると思います。折り合いをつけることですね。

でもそれができず、常に相手の悪いところを見つけようと、同じ相手を嫌う人を探し、郎党を組もうとする人たちがいます。でも果たして敵の敵は友達になれるのだろうか。それこそ一時的な利害関係が一致しただけの、いわば烏合の衆です。

刑務所では受刑者間のトラブルに関しては、暴力沙汰にでもならない限り、刑務官が関与することはほとんどありません。むしろトラブルの種を作り、受刑者同士をいがみ合うように仕向け、合法的に苦しませているのではと思うほどトラブルを放置している状態です。

例えば、集団生活において、年寄りや障がいがある人がいじめに遭っても、刑務官が止めることはほとんどありません。ひどいときはやくざを使って受刑者を管理する刑務官もいます。牢名主というやつですね。現代は工場長と呼びますが。その下に位置するのは房長で、こちらも非公式な存在で、各部屋のルールを作り、力で従わせているのです。刑務所ではやくざは上位に立ち、性犯罪者や障がい

のある人は最下位になっています。高齢者は格好な餌食で、動作が遅いというだけでチンダラしてんじゃねえよと怒鳴る人たちがいます。刑務官はこれを見逃すうえ、それ以上に怒鳴り、80代、90代の高齢者に対しても受刑者だからと、軍隊式の行進を求め、強制しています。

このような状況下にある刑務所で、ヤクザと力のある野蛮な者たちの作ったルールが横行している。これを暗黙のルールとして従う受刑者が多く、従わないものは故意に規律違反をし、そのひどい工場、あるいは舎房から出ていく。その代償は規律を破ったから、出所が遅れ、軽くでも一か月の隔離と7日の懲罰(何も無い部屋で一日中正座するだけの拷問)、重い場合は60日の懲罰を受ける。

このような刑務所では、更生する気になりにくいと思います。ではどうすればよいか。規律を厳しくすれば、いじめはなくなり、受刑者も悪いことをしなくなると考える人たちがいます。

それで日本の刑務所は世界一規律の厳しいところになっています。水道があるけど、刑務官の許可がないと、一口の水を飲んだだけでも罰せられ

るのです。これを節水違反と言います。工場だけに時計が壁に掛けられていますが、休憩時間以外にこれを見ることは禁じられ、罰せられます。これをわき見と言います。もう休憩になりそうな時こそ時間を知りたいわけですから、それを見させないなんて。

改めて考えますと、平和とは安心して暮らせる社会と思います。その安心は暴力によって維持することは摂理に反しており、暴力は必ず被害者を生みます。暴力を背景に作り出したルールはごく少数な人にしか恩恵を与えません。その中に入ろうとすると、必ずそのツケが回ってきます。

ではどうしたらよいか。おでこに暴力反対と書けば平和になれるか？ ならないと思います。でも暴力を背景に作られたルールに従わず、同調しないという選択肢があります。刑務所で朝起きたらあいさつします。ヤクザとかの大物に丁寧に挨拶する人たちがいます。これを親しきにも礼儀ありという人たちがいます。私たちには年寄りにも体の弱い人にもあいさつするという選択肢があります。

ミスは誰でもします。立場の弱い人がすると、ここぞとばかりに攻撃し、責

める人たちがいます。それに同調せず、それで非公式なペナルティを課そうとするとき、賛成することで己の安泰をはかろうとするのではなく、はつきりとノーと言う選択肢があります。

これには勇気がいります。殴られるという恐怖もあります。実際に殴られることも多々あります。でもその小さな積み重ねでよい生活環境、よい人間関係を作ることができます。人権がないとよく受刑者が言います。私も言ってきました。では人権は刑務官だけが作るものですか？ 違います。相手の存在を認め、理解しあおうとしないと、平和になれませんし、自分の問題に取り組み、更生できる環境を作れないと思います。

今、目の前でいじめが起きていたら、見て見ぬふりをしないでください。見て見ぬふりをしていたら、それが当たり前になり、近い将来、あなたがそのいじめ遭うことになります。

今、いじめをしているのなら、やめなさい。それは格好悪いことです。くだらない正論はやめてください。強い人に言えない理屈はただのあら捜しで、いじめです。トイレの流し忘れくらいで目くじらを立てているとしたら、ヤクザ

とかが同じことをやっても言えないようなら、我慢することです。トイレの流し忘れは自分でもするでしょうからね。

今回のテーマは平和です。平和は暴力では維持できません。理解しあい、認め合うことでしか維持できないと思います。

それでもいじめをやめない人がいます。お前は どうしていたと聞かれると、都合が悪いですね。私は喧嘩しても悪いやつらに同調しません。其れも暴力ではないかと言われると、何も言い返せません。矛盾しています。それでも私は暴力反対と言いたい。そして正義のつもりでやってきたこと、やっていきたいことを、暴力だけに頼るのではなく、問題解決方法はほかにもあるはずと信じ、その思いでこの活動を始めています。ご拝読ありがとうございます。



この絵も瑛子さんの作品です。プロジェクトでは瑛子さん作のミニカードを販売し、運営費に充てています。

誰でも願う平和

文通担当 西原 瑛子

平和を願わない人はいません
それなのにいつ戦争が起こるか
ではなく起こすかわからない、危機に
あることを恐ろしく感じています。

1945年8月6日、広島に投下された原子爆弾。私は10歳でしたし、中国山脈で隔てられた島根県に住んでいたため、なんの被害も受けませんでした。その直後は、「今までにないものがおとされたらしい」という大人たちの恐れの言葉を聞いただけです。新聞も遅れ遅れで来ていた時代です。

8月15日に敗戦になり、軍国主義から民主主義に代わり、広島、長崎の被爆の現状を報道され、幼い私たちも「いくら真珠湾攻撃した日本が悪いとはいえ、今までに使ったこともない一瞬にして焼き殺すものを投下するなんて、アメリカは非道だ」と思ったものです。

訃報

以来 70 年、戦争放棄、核兵器廃絶を唱えてきました。第 2 次世界大戦の悲惨を体験した年代は戦争反対です。歴史の書物で戦争の悲惨を学んだ年代には体験がないから、総理も戦後っ子だから被爆者のことはわかっておられても、本当の苦しみはおわかりになってないと思います。

北朝鮮の重なる実験により、近国の日本を守るためどうすればよいのでしょうか。

「戦争はしない」と強く主張すべきだと思います。自衛隊員にも家族があり、文字通り矢面に立たされるわけですし、首相は戦争には行かないでしょう。もし近未来子供や孫たちが徴兵されたら、悲しいことばかり起きます。

平和とは戦争しないことばかりでなく、日常家庭内の平和も指しますが、家庭内の平和は家族と環境の問題です。戦争は国家対国家多数決の為政者の言うなりになってしまう恐れがあります。

戦争は反対です。

プロジェクトの特別会員であり、横浜事務所への窓口差入も担当して下さっていた Y.U.さんが心不全で逝去されました。

生前のご協力に感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

事務局便り

◎事務局の移転

事務局の移転が終了しました。旧住所でも一年間は転送されますが、受刑中の皆様には新住所での登録を済ませるようにお願いします。

事務局の新住所

〒134-0003

東京都江戸川区春江町 5-15-31

ほんにかえるプロジェクト

旧い住所でも一年間は転送してもらう手続きはとってありますので、ご安心ください。

さて、新しい家はトタン葺きの築 50 年の戸建てです。壁にも断熱材が一切入っていませんので、今の時期は熱地獄です。前のところはマンションでしたので、スタッフらは手拭いで保冷剤を首に巻き、ある程度凌ぐことができましたが、今度はそうはいきません。さっそく湿疹が出るスタッフが続

出して、引っ越しの疲れもあって、ダウンしました。

ちょうど中学校の恩師が訪ねてきて、スタッフの話聞き、先生がエアコンを寄付してくださいました。今スタッフが集まる時間帯だけエアコンを使用しています。

いま、事務局のパソコンもプリンターも貰い物の中古です。HDD もいっぱいになり、しょっちゅうフリーズします。そのため2～3日業務が停止することもあります。待ちわびているかえるメイトが大勢いることはスタッフの心の負担になっています。本当に申し訳ありません。

◎更生支援事業部第2部の新設

プロジェクトは発足して2年になります。宣伝らしいことを何もしていないのに、入会希望は殺到しています。それだけ受刑者の置かれた現状は大変厳しく、支援が必要と認識しています。

しかし財政難により、新規入会を受け入れるどころか、既存会員に対しても、会費の引き落としをせず、退会を勧めている状態です。財政難はどのくらいのレベルか、内部関係者も今一つ理解していない節がありますが、年間必要経費は200万円であるのに対して、会費、寄付、転

送手数料といった収入は50万円にも満たないレベルです。

財政難で活動の継続が困難な状況にあるにも関わらず、入会希望が殺到しています。このジレンマを解消するために、協議のうえ、「更生支援事業部第2部」（以下第2部と略す）と称する部署を新設することにいたしました。

第2部は年会費2,000円。支援者に寄付していただいた書籍のリストを送り、年に3回書籍を提供する。1回で提供できる冊数は各刑務所の差入制限冊数内とし、なおおかつ厚さ3センチ、重さ1キロ以内とします。つまり、冊数制限が5冊の刑務所にいる方には5冊を送れますが、リクエストした5冊を封筒(A4サイズの紙が入る大きさ)に詰めた際、全体の厚みが3センチ、もしくは重さが1キロを超えた場合、冊数を減らします。

第2部会員はネット検索及び購入代行サービスを受けることはできません。

位置づけとして、第2部は、まず受刑者が定価でしか書籍を購入できない現状を理解し、受刑者が格安で書籍を入手できるようにしたい。50%の刑務所は差入制限が3冊で

すので、年3回で合計9冊の提供できます。第2部会員にとって約220円で1冊の書籍を入手できる計算です。一方ではプロジェクトにとって、年間で900円の収益をもたらします。そして、現在はフルサポートの第1部に入会したい方に対して審査制を導入しています。具体的に言うと、無期懲役の方を優先し、有期刑の場合も意思疎通可能と判断できるだけの手紙を書ける方に限定しています。審査とは数回の手紙のやり取りをし、以上の条件を満たしているかどうかを見極める。

意思疎通はとても大事です。まず御社と称してくるのは却下します。業者ではありません。入会を検討するから資料を送れる的な文面のもも却下します。受け入れるだけのスタッフ数も資金ありません。即入会と認める例として、35年間受刑して、一度も差入がなかった無期の方、更生できなかった原因を本人なりに考え、素直に話してくれた方です。バカ丁寧にほめてくれる人がいますが、それで入会を認めることはありません。共感とは褒められることではありません。更生できない苦しみをさらけ出し、どうすればよいかを共に考えたいものです。

ほんにかえるプロジェクトは会員を募集しています。正会員の年会費は3000円。寄付もお待ちしています。振込先
ゆうちょ銀行
10160-86239211
他行からの場合
ゆうちょ銀行018支店
(普) 8623921
口座名義は
ほんにかえるプロジェクト

ほんにかえるプロジェクトは**ボランティアスタッフを募集**しています。在宅のままでもできるパソコン入力と文通スタッフが特に不足しています。自宅の住所を公開する必要もありません。プライバシー保護に細心の注意を払っております。

プロジェクトの活動資金の検出の一環としてオリジナル葉書のほかに小冊子も販売するようになりました。第1冊目は汪が書いた「私の生い立ち」(A5サイズ88頁)、500円で販売し、その収益は全額支援活動に充てます。好評につき、手作業で増刷中です。

発行所
〒134-0003 東京都江戸川区
春江町 5-15-31 ほんにかえる
プロジェクト事務局
責任編集 汪楠(わんなん)
電話 080-8811-5465